

二人の班長と助理

後から知ったことだが、あの感冒の時、そろそろ班長を決めなければと、教室では班長の選出があったと言う。日本で言えば学級委員兼連絡係と言ったところか。男性、女性各一名が決まり、男性は植松さんが女性金晨星が、それぞれ班長に決まった。二人ともやる気満々のところがあるので、然るべく決まったのだろう。

植松氏には初めの頃お世話になったが、人物評としては、とにかく学ぶのに真剣なところに好感が持てた。ある日、キャンパスでぶらついていると、向こうからイヤホンをつけた青年が来るではないか。向こうも気づき挨拶した相手は植松氏だった。暇があれば中国語の音声を聞いていたのだ。授業でも、寸劇を中国語で演じる時など、ちょっとした小道具を用意して、その場を盛り上げていた。紳士的で育ちの良さを感じさせた。大学では生物の分野を専攻したそうで、理系出身者の一人だった。親は医者だとか。何となく余裕のある家庭に育った感じがした。

実は金晨星もその点では似た環境の人だったようだ。親が医者だという点で同じ。トロントの大学で修士まで行って、食品化学を専攻した理系出身者だった。何故か5分遅刻の常習だったが、学習には意欲的だった。ゴルフは相当な腕前らしく、留学生活をしながら大連市でもインストラクターをしていると聞いた。何となく同じような背景をもった二人が班長になったと言う訳だ。

余計なお世話だが、授業前に登校し学習に前向きに取り組む、また人より社交的という点では、金珉珠も相応しいところがあった。晨星に決まった理由は聞いていない。しかし、一つ言えることは晨星は担任の劉先生に、やたらとなついていた。そういう意味で、珉珠が晨星の勢いに気おされたのかもしれない。班長がいるおかげで何かとクラス内の連絡が好都合だったことは言うまでもない。例の WeChat を使って、宿題の有無など確認することもできた。

そうして7月に学期が終わった時、成績優秀で二人は何らかの賞をもらったそう。留学をそこで終わりにした私は、期末考査終了後、旅に出かけたので、その後の式典には出ないまま帰国した。詳しいことはわからない。

日本の大学などではどうしているだろう。学生と教務全般をつなぐ職務として、中国には或いはこの大学には、助理という補佐役がいた。晨露さんだ。

彼女は、午前中の授業の中間の休み時間にやって来て、担任の劉先生の代わりに庶務的な仕事を、時には各学生の事情に応じて、それぞれ個別の対応まで引き受けていた。時には、その件で班長とも話していた。英語も使って仕事を

していたので、国際教育学院に雇用されていたのだろう。学期中に、市内見学、郊外への遠足、大連市の行事である徒歩大会への参加と、三大校外イベントがあったが、その度に学生たちの世話を引き受けていた。私は徒歩大会を楽しみにしていたが、エントリーにはスマホの電話番号が必要と直前に聞いた。しかし、現地で電話を購入しなかったためにその番号がない。すぐに知り合いの電話番号を紹介してくれ、エントリーに間に合って一件落着した。この人にも何かとお世話になった。